令和六年九月度　御報恩御講拝読御書

四信五品抄

建治三年四月初旬　五十六歳

濁水心無けれども月を得て自ら清めり。草木雨を得て豈覚り有って花さくならんや。妙法蓮華経の五字は経文に非ず、其の義に非ず、唯一部の意ならくのみ。初心の行者は其の心を知らざれども、而も之を行ずるに自然に意に当たるなり。

（御書一一一四ページ一六行目～一八行目）

令和六年九月度　御報恩御講　『四信五品抄』（御書一一一四ページ一六行目～一八行目）

【通釈】

濁った水に心は無いけれども月影を浮かべて自ら澄んでいる。草木も雨に潤って花を咲かせるのであって、覚りを得て花開くのではない。妙法蓮華経の五字は経文ではなく、またその義でもなく、ただ法華経一部の意なのである。初心の修行者はその心を知らなくても、唯（ただ）信じて唱え修行することで自然に妙法蓮華経の意に当たるのである。

【主な語句の解説】

四信五品…法華経の分別功徳品第十七に説かれている「現在の四信」と「滅後の五品」のこと。釈尊在世と滅後において修行者が寿量品の説法を見聞して得る功徳の位をいう。

「現在の四信」とは、①一念信解（いちねんしんげ）＝法華経を聞いて信心を起こす初心位。②略解言趣（りゃっげごんしゅ）＝仏の説法をほぼ理解して智慧を起こす位。③広為他説（こうためたせつ）＝仏の説法を聞いて理解し、他に法を説く位。④深信観成（じんしんかんじょう）＝仏の説法を深く信じ、観行を修して真理を体得する位。

「滅後の五品」とは、①随喜品＝仏の説法を聞いて随喜の心を起こす位。②読誦品＝経典を受持読誦する位。③説法品＝経典を受持読誦し、他に法を説く位。④兼行六度品＝経典の真理を悟るために観心を修し、兼ねて六度を実践する位。⑤正行六度品＝仏の経説の真意を会得し、正意として六度を実践修行する位。

文義意…文とは経文の面、文相のこと。義とは経文に示された教え。意とは文義の奥底に存する仏の本意のこと。総本山第二十六世日寛上人は、『文底秘沈抄』で「文は則ち一部の始終能詮の文字なり、義は則ち所詮の迹本二門の所以なり、意は則ち二門の所以皆文底に帰す、故に文底下種の妙法を以て一部の意と名づくるなり」（六巻抄七二）と釈されている。

【背景と大意】

本抄は、建治三（一二七七）年四月初旬、日蓮大聖人御年五十六歳の時に、富木常忍より身延の大聖人へ信行の心得を質問したことに対する返書です。『四信五品抄』との題名は後に付けられたもので、「末代法華行者位並用心事」等の異称があります。なお、日興上人により御書十大部の一つに選定されています（富士一跡門徒存知事・御書一八七一参照）。

この年の三月二十三日、富木常忍は弁阿闍梨日昭を通じて、大聖人に質問をしました。それは、どのように修行すれば諸法の理を得られるのか、五辛を食べた後に身を清めずして読経してもよいか等についてであり、それに対する御返事が本抄です。

内容は、まず法華経を修行するには戒定慧の三学を修する必要がある旨を説かれ、中でも末法における三学は、妙法受持の一行に尽きることを明かされています。続いて末法初心の行者の位について、また、その修行法と唱題の功徳について述べられ、最後に仏法と王法との興亡関係を教示されています。

本日拝読の箇所は、妙法蓮華経の五字は法華経の肝心であり、これを唯一心に信じ行じていく意義と功徳を説かれています。